

がん患者の“食べる”に寄り添う

～食べることをあきらめない～

企画 吉田恵理子(長崎県立大学看護栄養学部看護学科)

連載にあたって

人にとっての「食べること」とは、その生命を維持するための絶対の営みであり、生きることそのものです。食生活というものは、人それぞれの生活習慣、地域の文化とも深くかわり、ほかの人々との交流を生み、生きることの楽しみ、さらには生きる力にもつながるものでもあります。

がんの患者にとって、「食べること」とは、治療の完遂のための体力維持に必要不可欠なものであり、「食べること」は患者の精神的健康観や QOL に大きく関係し、「食べること」が、楽しい、美味しいと感じることは、患者の生きがい・生きることへの意欲にもつながります。しかし、がん患者さんの多くは、嚥下障害、悪心・嘔吐、口内炎など、治療の副作用からくる「がん関連性低栄養」あるいは、がんそのものによる全身性のエネルギー代謝障害によって、栄養消費量増加に起因した「がん誘発性低栄養」状態が生じ、それらによる体重減少や低栄養は、不良な予後とも関連するといわれています。さらに、「がんと言われた」「治療がづらい」「変な味がする」など、患者さん、またご家族は、まずは治療や病気のことに心が向いてしまい、食べることは二の次になられることも多いのではないのでしょうか。

私たち看護師は、がん患者さんが抱える食のリスクと制限のなかで、がん患者さん・ご家族が「食べるを楽しむ」ために、どのような知識をもち、どのような選択をし、多職種と連携し、どのようなかわりをもつべきなのでしょう。

「安全」に食べることは確かにとても大切なことです。しかし「安全」のため、十分なアセスメントをしないまま、口から食べることが簡単にあきらめられてはいないのでしょうか。

本企画では、がん患者さんの口から「食べるに寄り添い」、口から「食べることをあきらめない」看護について考えるヒントとして、それぞれの現場で、がん患者さんたちの口から食べたいという思いを受け取り、口から食べる喜びを感じることができるよう、食べるを支えるための看護実践に活用していただけることを願い、さまざまな角度から、がん患者さんの食べることについての基礎知識やアセスメント、具体的な取り組みを紹介します。